

『宋書』 隱逸伝の陶淵明

稀代麻也子

はじめに

沈約の『宋書』に隱逸伝（卷九十三）が立てられていることは、隱士が宋という時代を特徴づける存在の一であったことを示す。ところがここに名を連ねている陶淵明は、意外なことに『宋書』の描く「宋の時代の隱士」の典型からは微妙にずれている。陶淵明以外の一六名は名山に隱棲して仕官することを頑なに拒む姿に焦点を絞って描かれているのに対し、淵明の伝は彼自身の作品を中心に構成される。費やされる文字数も淵明が格段に多い。

本稿の目的は、隱士としての言動がどうであったかを第一に問題としている筈の『宋書』 隱逸伝の中にあつて、陶淵明に限って作品があまりに大きな比重を占めていることを検証し、沈約が陶淵明を何故そのように扱ったのかを考察することにある。

『宋書』は、劉裕の即位以前に没している人物を一五名載せている。一方で、やはり劉裕の即位以前に没した別の一四名に関して、「晋に帰すべき人物だから載せない」（卷一百自序）とわざわざ断り、以下の理由を挙げて除外している。

身為晋賊、非関後代。

身は晋賊為り、後代に関するに非ず。

義止前朝、不宜濫入宋典。

義は前朝に止まれば、宜しく濫りに宋典に入るべからず。

ず。

志在興復、情非造宋。

志は興復に在りて、情は宋に造るに非ず。

以上の三点から、『宋書』に載せるかどうかの基準はその

人物が宋朝を是としていたか否かにあるのであつて、劉裕の即位自体にあるのではないことがわかる。このことを踏まえた上で、陶淵明の卒年以前に没して『宋書』に立伝されている四一名^①（劉裕即位以前に没した一五名を含む）を検してみると、殆ど全てが劉裕のもとで活躍して建國に協力した人物か、建國後に出仕するなり、劉裕と密接に関わりを持つたりした人物であることが確認できる。ところが、陶淵明の場合は違ふ。後に詳しく見てゆくように、曾祖父の陶侃が晋の宰相であつたことから劉裕の宋朝建國に協力せず、その志を詩文中において宋の年号を用いないことによつて示したといふのである。この記事を載せた沈約は淵明の「義」が「前朝に止」まつていたと認識していた筈であり、それならば顔延之の「陶徵士誄」のように「有晋の徵士」と認定して『宋書』には載せない方が自然であるといえる。それなのに、なぜ沈約は陶淵明を敢えて『宋書』で描かなければならなかつたのか。この問題は、隱逸伝に載せられる淵明が実は隱士としての類型化から逸脱して描かれているという問題と密接に関わつてゐる。そこで以下、淵明の伝が隱逸伝の中で例外的に作品を主体として構成されていること、また、最初は隱士として描き出されていた淵明の姿が途中で微妙に変化していることを検証す

る。これらの問題を説明することを通して、淵明が沈約によつて宋籍に帰せしめられたことの意味を考えたい。

二、

『宋書』において、陶淵明と彼以外の隱士の記述で大きく異なるのは、引用の仕方である。淵明以外の隱士の場合には、雷次宗の伝に次宗の書いた一篇を載せるのが辛うじて認められる程度であり、残りの人物の伝では断片的な言葉や伝主以外の書いた文章を引くに止まる。卷九十一—九十四における孝義・良吏・隱逸・恩倅の各伝に範圍を拡げてみても、長篇の引用はわずかに恩倅伝の徐爰に三篇あるだけである。しかしこの場合一篇は詔であり、徐爰自身書いた二篇も事実關係を示す為に引かれたものに過ぎない。沈約は徐爰を継いで『宋書』を完成させたのだが、その徐爰はあくまでも恩倅という枠内で恩倅たる姿に比重をおいて描かれているといえる。これに対して陶淵明の場合には隱士としての姿が彼自身の作品二篇を交えて語られるだけでなく、さらに隱逸を強調しているとは言えない「与子書」・「命子詩」の二篇が引かれ、あわせて四篇もの作品によつて淵明を浮き彫りにしようとしている。

以上に加え、隱士としての記述のされ方自体も陶淵明と

他の人々とは違っている。淵明以外の場合は、名山に隠棲したことや繰り返し徴せられても出仕しなかつたという隠士らしい行動を描くことに主眼がおかれている。そこから読みとれるのは「事止於達人（事は人に違ふに止まる）」（隠逸伝序）隠士の姿である。ところが淵明の場合には、隠逸というポーズをとる為に名山や有力者に対する抵抗が必須とされるのではない。主眼は陶淵明の心の状態が「欣」（「五柳先生伝」・「帰去来」・「与子書」）及び有力者王弘の意を受けた友人龐通之とのやりとり）であることにこそあり、そうでさえあれば、たとえ王弘がやってきたとしても「亦無忤也（亦忤ふ無き也）」であつた姿の方をこそ写し取ろうとしている。「不仕」という行為に関してはまた、後に触れるように「曾祖父が晋の重臣だつたから」だという「孝」の思想に連なる理由付けがわざわざなされている。さらに、沈約が陶淵明を必ずしも典型的な隠士として描こうとしていたわけではないことを側面から示すと思われるのは、「尋陽三隱」に関する記述の問題である。陶淵明が尋陽三隱の一つであることを、『宋書』では同じ隠逸伝の周統之伝に載せる。「周統之が慧遠に仕え」「精進した」という記事の間に、次の文章が挟まれている。

時彭城劉遺民遁迹廬山、陶淵明亦不応徵命、謂之尋陽

三隱。

時に彭城の劉遺民廬山に遁迹し、陶淵明も亦徵命に応ぜず、之を尋陽三隱と謂ふ。

一方、『蓮社高賢伝』⁵⁵中の周統之の伝では「周統之が慧遠に仕えて精進した」とひと連なりに書くだけで三隱のことには触れず、最後に附載する淵明伝（「不入社諸賢伝」）において次のように記される。

及宋受禪、自以晋世宰輔之後、恥復屈身異代、居潯陽柴桑、与周統之・劉遺民並不応辟命。世号潯陽三隱。宋受禪するに及び、自ら晋世宰輔の後たるを以て、復た身を異代に屈するを恥ぢ、潯陽柴桑に居り、周統之・劉遺民と並びに辟命に応ぜず。世潯陽三隱と号す。

陶侃の後裔である自分が別の王朝に身を屈することはできないとして出仕せず、周統之らと共に潯陽柴桑にいたため潯陽三隱と言われた、とするのである。『蓮社高賢伝』のこの後の記述は、「与子書」中の言葉と『宋書』で義熙末のこととして記される記事とを混在させており、隠士としての淵明を更に印象深く描き出そうとしている。⁶⁶

『蓮社高賢伝』の編者が「隠」を鮮明に印象づける「潯陽三隱」の記事を入れた部分に、『宋書』は「所著文章、

皆題其年月」(この前後を含め、三章一節に引用する)と前置きした上で年号に関する記事を置く。晋宋革命で遺臣の立場をとったという重大な「事実」に読者が注意を向けたまさにその時、『蓮社高賢伝』は豊みかけるように淵明の隠を世評によつて権威付けようとした。『蓮社高賢伝』は「隠」という文字を、淵明の行動に対する「客観的評価」として有効に使おうとしたといえる。一方、『宋書』はここでは「隠」という文字を使わず、「所著文章云々」という言葉を持ち出して、自分の文章を宋に帰せしめようとしなかつた淵明自身の決意を示そうとした。これは沈約の興味が、「潯陽柴桑に居」た淵明の「身隠」(隠逸伝序)的行動を読者に再確認させることよりも、自分の文章に書き添える年号に拘つた淵明の、声高ではないが断固たる姿勢を読者に認識させることの方にあつたことを示す傍証の一つとなるのではないだろうか。

そもそも、沈約は隠逸伝の序で、模範的とされる隠士をたつきりと否定しているのである。

夫隠之為言、迹不外見、道不可知之謂也。

夫れ隠の言為る、迹は外に見れず、道は知る可からざるの謂也。

道というものが目に見える形で行動として表現できるもの

ならばわかりやすいが、「隠」とは本来そういう性質のものではない。

豈肯洗耳潯浜、噉噉然頭出俗之志乎。

豈に肯へて耳を潯浜に洗ひ、噉噉然として出俗の志を

頭かにせんや。

本當の「隠」は客観的に確認することができないのだから、本物であれば、あの許由のようにわざわざ川の水で耳を洗つて殊更に出俗の志を人に見せつけようとはしない。

沈約は真の隠士の伝など書きようがないとして、『宋書』ではとりあえず許由のような人物をとりあげるだけだといふのである。⁷⁾ 序の言葉を信じる限りでは、沈約は『宋書』の隠逸伝に立伝されている人物を真の隠士として顕彰する気など、最初からなかつたといふことになる。⁸⁾ このことを裏付けるかのように、隠士としての言動に重きをおいた淵明以外の一六名の記述は短く、百衲本により確認してみると以下のようなになる。

- | | | | | | |
|--------|------|--------|-----|--------|-----|
| 1 戴顓 | 六六九 | 2 宗炳 | 六五六 | 3 周統之 | 五九一 |
| 4 王弘之 | 七五三 | 5 阮万齡 | 一四九 | 6 孔淳之 | 二七〇 |
| 7 劉凝之 | 三二九 | 8 龔祈 | 一四八 | 9 翟法暘 | 二〇二 |
| 10 陶淵明 | 一六六九 | 11 宗彧之 | 一三三 | 12 沈道虔 | 三八九 |
| 13 郭希林 | 一〇五 | 14 雷次宗 | 七一〇 | 15 朱百年 | 三八四 |

一見して明らかなように、淵明とその他の一六名との間には、文字数において顕著な差がある。このように淵明の伝が長いのは、実は『宋書』が彼を隠士らしい隠士としてのみ描こうとしているわけではないからである。それを次章で具体的に検証してゆく。

三、 (1)

『宋書』陶潜伝をその構成に着目して図式化すれば、次のようになる。

A 淵明の紹介

I 「五柳先生伝」

B 出仕と辞職の間の事情説明

II 「帰去来」

C 義熙年間の事情説明

D 淵明が晋の人であり、宋の作品は甲子で示したこと

III 「与子書」

IV 「命子詩」

E 卒

先ず、Aで簡単な紹介がされ、Iが引かれる。Iにはいかにも飄々とした人物として五柳先生が描かれているが、

これは「少有高趣^⑤（少きより高趣有）」った陶淵明が自身の姿を語ったものである、と沈約は位置づけている。それは引用前に「嘗著五柳先生伝以自況（嘗て五柳先生伝を著して自ら況ふ）」と記し、さらに引用後に「其自序如此、時人謂之実録（其の自序此くの如し、時人之を实録と謂へり）」と念を押していることから明らかである。すなわち、『宋書』に引用されている文脈にのつとる限りにおいては、五柳先生は陶淵明その人を象徴しているということであり、従って語り手や登場人物と作者との間の相違を考慮する必要はない。五柳先生が「著文章自娛、頗示己志（文章を著して自ら娛しみ、頗か己が志を示）」したように、淵明も文章を著して「言其志（其の志を言）」った。Bでは必要に迫られて出仕しては帰隱する淵明の姿が、酒にまつわる挿話を交えて描かれ、さらに「我不能為五斗米折腰向鄉里小人（我五斗米の為に腰を折りて郷里の小人に向かふ能はず）」と啖呵を切った淵明が職を去るにあたって賦した作品としてIIが引かれている。IIの「以心為形役（心を以て形の役）」としていた自分の官吏生活をきっぱり捨て去るのだという言葉は、この引用の前後でB・Cと説明される淵明の姿と見事に一致している。Cでは義熙末のこととして王弘や顔延之を始めとして貴賤と交わりがあつたこ

とを、酒や無絃琴に関連づけて述べる。以上みてきたように、A・I・B・II・Cまでは淵明の言動に重点を置いて彼の隠士としての姿を描いており、隠逸伝にふさわしい記述となっている。

ところが、Dで少し様子が変わる。

潜弱年薄宦、不潔去就之迹。自以曾祖晋世宰輔、恥復屈身後代、自高祖王業漸隆、不復肯仕。所著文章、皆題其年月、義熙以前、則書晋氏年号、自永初以来唯云甲子而已。

潜は弱年より薄宦にして、去就の迹を潔くせず。自ら曾祖晋世の宰輔たるを以て、復た後代に屈身するを恥ぢ、高祖の王業漸く隆んなりしより、復た仕ふるを肯んぜず。著す所の文章、皆其の年月を題するに、義熙以前は、則ち晋氏の年号を書し、永初より以て来唯のしかただ甲子を云ふのみ。

まず、「若い頃から官途に恵まれなかった。陶侃が晋の重臣だったことから宋に仕えることを恥じ、劉裕が台頭してからは二度と出仕しようとしなかった」と、淵明が宋朝に仕えようとしなかった理由が語られる。淵明の伝を『宋書』に載せたことと、前二篇を引用した時点で陶淵明の伝が既に隠逸伝内の他の一六人の誰よりも長くなることを

考えあわせると、Dをわざわざ挿入する必然性が乏しい。

『晋書』では陶淵明を晋の人とする為に好都合なこの記述が無いことによつて不自然さが生まれているが、『宋書』の場合はこれとは逆に、Dがあることによつて不自然さが生まれている。さらに「文章には必ず年月を添えたが、義熙までは晋の年号を使っていたのに、永初からは甲子で年を示すだけになった」という話を持ち出して、淵明の決意の堅さを「文章」と関連づけて具体的に示す。そして自身の「志」を伝えようとして子に書を与えたとし、内容的には極めて個人的な文章を引用する。それもIIIの一篇だけではなく、だめ押しのようにIVも引くのである。伝を長くしたいだけならば、淵明には「読山海経」や「擬古」などをはじめとして、隠士たるにふさわしい作品がいくらかもある。それにも拘わらず敢えてこのような個人的な二篇が後半部分を構成していることによつて、隠士としての淵明の像は不明瞭になる。前半に描かれた淵明の生き方がもつ魅力は、淵明を安易に既存の枠に押し込めてしまう危険性を内包する。沈約は、「事は人に違ふに止まる」隠士と淵明との質的差異を見抜き、陶淵明を矮小化してしまうようした解釈の方向をある程度修正しようとしていたのではないだろうか。

前節で確認したように、沈約は『宋書』の前半に描いてきた淵明の隠士としての姿を、更に引用を重ねることによって曖昧にしてしまっているが、これは『宋書』以外の淵明伝の記載と比較することによってより一層はつきりする。

(◎||引用/○||題名のみ/×||作品として言及なし)

	I	II	III	IV
「五柳先生伝」				
「帰去来」				
「与子書」				
「命子詩」				
「陶徵士誄」	×	○	×	×
「陶淵明伝」	○	○	×	×
「南史」	◎	◎	◎	○
「晋書」	◎	◎	×	×
「蓮社高賢伝」	○	○	×	×

大部分の淵明伝は後二篇を取り上げていないが、『宋書』にはこれらがある。IIIでは、我が子に対する言葉を通して父親の淵明自身が「欣」び「歎」び「喜」ぶ羲皇上の人に他ならないことを語り得ていることから、そこに述べられ

ている孝が単なる教説ではないことがわかる。こういう意味においても、IIIは「陶淵明のトータルな生のありよう」が「語り尽くされ」^⑦ていることになる。続くIVで、読者は淵明が「斯情無仮(斯の情仮無し)」と世の親に深い共感を抱いていること、「爾之不才、亦已焉哉(爾の不才なるも、亦已んぬるかな)」と儼に深い愛情を抱いていることを感じとり、遠い先祖から我が子へと脈々と続いていく陶氏の流れを、淵明の感情を通じて知ることができる。

『宋書』が前半と後半とで質を変えていることについては、引用作品のあり方自体からも確認することができる。例えば、想定された読者という観点からいえば、前二篇では読者は世間一般であり、後二篇の読者は具体的に我が子と限定されている。語り手の視野に入ってくる人物という点からみると、Iは五柳先生の一人称の世界であり、IIは稚子など家の者を加えて三人称の世界も想定される。いずれにせよ前二篇は独白といえる。これに対して後二篇においては、IIIの「吾」と「汝」、IVの「我」と「爾」という二人称の世界が展開されており、語りかける相手が出現している。IVではさらに「我祖」から「我」を経由して「爾」へ、という流れすらできている。

また、前二篇はBやCといった淵明の実際の言動に補助

される形で引かれ、後二篇はDに接続されて作品のみが置かれていたことから、引用のされ方が異なっていることがわかる。『宋書』の構成に従う限りにおいて、引用作品の世界は隠士として模範的なことを述べているが故に動きがなく自己完結的であるものから、現在の自分の感慨をできるだけ正確に伝えたいと試行錯誤しているが故に常に動き続ける余裕のあるものへと確実に深化しているのである。作品を並べ、補助的な言葉を補うだけで確かに生きている人物の姿を沈約が描き得たということは、他ならぬ陶淵明がそれぞれの時期にその時の自分を正確に表現するだけの力を身につけていたということである。そして『宋書』は、この四篇の作品のどれをとってみても淵明自身の言葉による淵明の伝となり得るように引用しているといえる。^⑧

Dによつて淵明が晋の遺臣としての自覚をもつていたとした上で宋代にIII IVを書いたかのように作品を並べていることは、沈約が淵明を前半の記述から容易に類推されるような隠士として描こうとしていなかったことを示す。『宋書』の淵明は、五柳先生という理想的人物と未分化な状態で登場し、理想通りに生きられない現実を知つて酒に象徴される隠士風の生き方を実践する。そして劉裕が即位して

からは自分の人生が決して理想的なものではなかったにも拘わらず静かなよるこびと共に受け容れていることを表明した。脈々と続く流れの中にある自分の確かさを語り伝えようとする淵明は既に五柳先生から自立して、自分自身の「忘懐得失（懐を得失に忘る）」（「五柳先生伝」）の境地に達し得ている。これによつて読者の前には、自分の生活を窮極の所で肯定しそれを常に誰かに伝えようとし続けた誠実な人間としての淵明が浮かび上がってくる。

また、Dに従えば淵明の作品は附される年が年号から甲子に変化したことになっているが、『宋書』はその前後における淵明の成長の迹を浮き彫りにすると共に、引用作品も淵明の実際の言動という解説を必須としない自立したものととして扱われるようになっていく。

その存在によつて隠逸伝という枠を踏み越えてしまう危険を冒してまで淵明の伝に後二篇が加えられたことと、本来晋に列すべき淵明を『宋書』に載せたこととの意味はまさにここにあつたのである。

以上みてきたように、陶淵明は隠逸伝を始めとする類伝において例外的描写のされ方をしているが、これは「帯叙法」において例外的描写のされ方をしている鮑照^⑨を思い起こさせる。鮑照が自分の現在の生活を大切にしてそれに即

した作品を書いていたことを、『宋書』では彼の言動を通してではなく作品によつて浮き彫りにしようとしていた。鮑照伝の場合と同じように作品引用がなければ成り立ち得ない淵明の伝も、目立つ言動によつて安易に形作られてゆく像の方にはなく、自分自身の言葉を作品に乗せようとし続けた文学者淵明の方にこそ沈約が興味をもっていたことを表しているのである。

おわりに

本稿では、『宋書』に描かれる陶淵明像のもつ不自然さを検証してきた。まず、なぜ沈約は晋ではなく宋の歴史書に彼を記したのかという、時代からの逸脱の問題。次に孝義・良吏・隱逸・恩倖と類型化されて立伝される人物に対する記述が概ねごく簡単なものに過ぎない中で、陶淵明の伝はなぜその類型化から逸脱して丁寧に書かれているのかという問題。最後に、孝の体現者としての姿まで描き出されている為に隱士としての姿が不明瞭になってしまつていくという、一般に要請される隱士像からの逸脱の問題。晋という時代・隱士という類型化・記述における簡潔性という、それに従つてさえいけば何ら不自然さを生じない枠

を、沈約はなぜ敢えて踏み越えなければならなかったのか。

沈約の叙述における逸脱の果てに見えてきたのは、常に現在を真剣に生き、その充実感を何とか人に伝えようとし続けた陶淵明の姿に他ならなかった。陶淵明の本質を、前朝の遺臣として帰隱の道を選んだ行動にはなく、帰隱後も静かに語り続けようとしたことの方に認めたからこそ、沈約は陶淵明を宋に帰せしめたのではないか。自分の生活を自分の言葉で正確に伝えようとし続けた人物としての淵明を描きたいという沈約の思い入れが様々に存在する枠を踏み越えさせた結果、偶像化された隱士ではなく、人間としての深みを増してゆく『宋書』の淵明が生まれたのである。

注

① 四一名は次の基準で選んだ。

i 『宋書』の伝のうち、宗室関係者としてまとめて立伝されている人物(巻四十一／五十二／六十一／六十八／七十二／七十九／八十／九十)と、巻九十五―二百を除く。

ii 百衲本の各巻内題に大字で記される人物、巻九十一―九十四に關しては本文で改行されている人物を全て挙げる。

iii 『宋書』の本伝を基本とし、わからない場合は『宋書』全体の記事から卒年を調べ、確定できない一六名を除く。

iv 以上により得た一四九名を卒順に並べた結果、陶淵明の卒年である元嘉四年(四二七)以前に死んだ人物は四一名となった。

卒年は以下の通りである。なお、卒年は確定できないもののその前後に死んだことがわかってる人物については名前のみを挙げた。

四〇七(義熙三) 劉懷肅/四一一(義熙七) 孫処/庾悅/四一三(義熙九) 王誕/四一五(義熙一一) 孟懷玉/四一五(義熙一一) 劉敬宣/四二六(義熙二二) 謝景仁/四二七(義熙三三) 劉穆之/四一八(義熙一四) 王鎮惡/四一八(義熙一四) 檀祗/四一八(義熙一四) 朱齡石/四一八(義熙一四) 傅弘之/四一八(義熙一四) 蒯恩/四一八(義熙一四) 袁湛/四一九(元熙二) 劉鍾(以上東晉)

四二一(永初二) 檀韶/四二二(永初二) 向靖/四二二(永初二) 謝瞻/四二二(永初三) 虞丘進/四二二(永初三) 孔季恭/四二二(永初三) 臧藩/四二二(永初三) 王鎮之/四二三(景平二) 孔琳之/四二三(景平二) 杜慧度/四二三(景平二) 周統之/劉瑜/張進之/四二四(景平二) 劉懷慎/四二四(景平二) 褚叔度/四二五(元嘉三) 徐広/四二五(元嘉三) 蔡廓/四二六(元嘉三) 徐羨之/四二六(元嘉三) 傅亮/四二六(元嘉三) 謝晦/四二六(元嘉三) 謝方明/四二六(元嘉三) 王惠/四二六(元嘉三) 賈恩/四二七(元嘉四) 劉粹/四二七(元嘉四) 王華/四二七(元嘉四) 鄭鮮之/四二七(元嘉四)

王弘之

② 例外の劉瑜(七一字)、賈恩(八四字)、張進之(二一六字)はいずれも孝義伝に載せられ、伝自体が極端に短い(百衲本による)。

③ 本稿の目的は陶淵明の実像を知ることではなく、『宋書』でどのように描かれているかを分析することにある。陶淵明の作品が事実としてそうであったかどうかということについては、朱自清『陶淵明年譜中之問題』(『朱自清古典文学論文集』四六〇頁以下。上海古籍出版社、一九八一年七月)などが問題にしている。

④ 陶淵明が本来『晋書』に列せられるべきであることを、趙冀は次のように述べる。「陶潜隱居完節、卒於宋代。故宋書以為隱逸之首、然潜以家世晋臣、不復仕宋、始終為晋完人、自應入晋書内。故修晋書者特伝於晋隱逸之末。二史遂並有伝、此宋書之借、而非晋書之奪也(陶潜は隱居して節を完うし、宋代に卒す。故に宋書は以て隱逸の首と為す。然れども潜は家世晋臣たるを以て、復た宋に仕へず、始終晋の完人為れば、自ら応に晋書の内に入るべし。故に晋書を修する者特に晋の隱逸の末に伝す。二史遂に並びに伝有るも、此れ宋書の借にして、晋書の奪に非ざる也)」。『廿二史劄記』巻七「一人二史各百伝」。

⑤ 清の王謨輯『增訂漢魏叢書』による。従って本稿では晋人撰とされる原『蓮社高賢伝』ではなく、その後に『蓮社高賢伝』に手を入れてきた人々の編纂意識を問題とする。

⑥ 『蓮社高賢伝』は、『宋書』の『与子書』にある「羲皇上人」

の記事、義熙末のこととして記される無絃琴の話と廬山訪問のことを記す。さらに『宋書』の淵明伝にはない慧遠との挿話が続き、隠士としての淵明の言動が強調された記述となっている。

⑦ 『宋書』隠逸伝序に関しては、吉川忠夫「六朝精神史研究」(同朋舎、一九八四年二月)、神塚淑子「沈約の隠逸思想」(『日本中国学会報』三一輯、一九七九年一〇月)、川合安「沈約『宋書』の史論(四)」(『北大文学部』紀要』四四—一通巻八五、一九九五年八月)などを参照。

⑧ このことは、孝義伝・良吏伝・恩倅伝についてもいえる。孝義伝序では「可昭被図象、百不一焉。今采綴湮落、以備闕文(昭を以て図象せらる可きは、百に一もあらず。今湮落を采綴し、以て闕文に備ふ)」と、記すべき事柄がなくなってしまうから、断片的な話を拾い集めると断つた上で孝義伝の人物を並べる。良吏伝でも「(立派な教化は望むべくもなくなってしまうが)採其風迹粗著者(其の風迹粗ぼ著るる者を探りて)良吏篇としたという。恩倅伝がマイナスの評価に基づいて立てられていることは言うまでもない。また、彼らに関する記述自体も断片的であったり、略歴を事務的に切り貼りしたかのようであったりし、短いものが多いことも隠逸伝と同様である。

⑨ 「少有趣」という四文字の「少」と「高趣」とは、「五柳先生伝」制作の時期と内容とを示唆するように読める(一海知義「陶淵明の自画像——五柳先生伝小考——」、『岡村繁教授退官記念論集 中国詩人論』汲古書院、一九八六年一〇月)。

⑩ この部分も含め、本稿では、史的事実がどうであったかではなく、『宋書』の描き出す「事実」がどうであったかという観点から論じている。

⑪ 清水凱夫氏は、『晋書』にD・III・IVの記述がないことについて、『晋書』編纂当時の状況を確認するという観点から、「陶淵明を晋の人とするには不可欠の記述を省いたのは、不幸な家族関係をもっていた季世民に阿った結果の曲筆である」という趣旨のことを述べている(『唐修『晋書』の性質について(上)』『学林』二三号、一九九五年七月)。

⑫ 大上正美『阮籍・嵇康の文学』(創文社、二〇〇〇年二月)三一頁参照。

⑬ 当時の書や詩が持っていた公的性格や幼子の識字不可能性などは、陶淵明の作品を考える場合には重要な問題である。しかし本稿は、「子に書を与へたとし「子に命ちやうくる詩を為りて以て之に貽」つたとして、陶淵明が語りかけた読者が我が子であったのだとする『宋書』の見解を考察しようとするものである。

⑭ 川合康三氏は「五柳先生伝」について、「中国的自伝の一つの型を創始したもの」(七七頁)とする(『中国の自伝文学』創文社、一九九六年一月)。

⑮ 拙稿「沈約『宋書』の〈帯叙法〉と鮑照伝」(『大久保隆郎教授退官記念論文集』、二〇〇一年六月刊行予定)参照。

(青山学院大学大学院)